

オウム対策住民協議会ニュース

烏山地域
オウム真理教対策
住民協議会

オウム真理教対策 第50回 抗議デモ・学習会を開催



令和7年5月10日(土)、烏山地域オウム真理教対策住民協議会は、抗議デモと学習会を実施しました。地下鉄サリン事件から30年となる節目の年に、私たちの抗議デモと学習会も50回目の節目を迎えることになりました。

抗議デモ・学習会は烏山地域の町会・自治会の皆さんを中心に、保坂区長や区議会、都議会、衆議院の各議員、そして足立区と滋賀県甲賀市の住民協議会の方々にも参加いただき、総勢192名となりました。

午後1時30分に参

加者は烏山区民センター前広場に参集し、抗議文を読み上げて抗議の意思を強く宣言した後に、シユプレヒコールを高々とあげてデモ行進を行いました。

ひかりの輪の施設前では、デモ隊の通過に合わせて抗議文を読み上げた後、郵便受けに抗議文を投函しました。

午後2時30分から烏山区民会館ホールで学習会を開催しました。今回は「犯罪を起こさせないためには」と題し、新全国犯罪被害者の会(新あすの会)副代表幹事の假谷実氏(目黒公証役場事務局長逮捕監禁致死事件被害者・假谷清志氏のご長男)の講演がありました。

講演では最初に、犯罪被害を受けた本人や家族を守り、元の生活に戻る為の法制度が、長年の活動により改正・新設され、メディアの取材手法も改善されてきた経緯を振り返り、犯罪被害者給付制度については、制度改正により遺族への金銭的支援が拡大したことを学びました。

次に、犯罪被害者本人や家族への支援体制を更に強化するには、「たらい回し」を回避し、行政各機関の情報共有と支援連携が必要であり、「犯罪被害者等支援コーディネーター」を中心とする「多機関ワンストップ

抗議文

地下鉄サリン事件から30年が経過し、被害者や遺族はいまだに苦痛に悩まされている。そんな事件を忘れたかのように上祐は、月刊誌上の対談で、まるでオウム真理教の部外者のように、自分はサリン事件とは関係ないと言っている。地下鉄サリン事件の時に日本にいたなら、関与をしないという訳にはいかなかったはずだ。ロシアに居た上祐は、紙一重の差で死刑囚と差が付いたのである。

生き残ったオウム真理教の元最高幹部 上祐が、未だ烏山で活動している。麻原の指示どおりに教団を分裂させ、麻原から脱却したかのように振る舞い続けても、我々は信じない。

麻原から脱却したと言うなら、オウム真理教のようなセミナーや聖地巡礼活動は止めて解散すべきである。信者達も自分たちの行く末を思い悩んでいるだろう。いつまでこのような生活を続けるのか。上祐の決断次第で解散はすぐにできる。それぞれが新たな道を選んでもう一度やり直すには、早いほうがいい。

今後も「ひかりの輪」が、このまま活動を続けるのであれば、我々は解散・解体するまで粘り強く闘うことを宣言する。

令和7年5月10日

烏山地域オウム真理教対策住民協議会
会長 古馬一行

サービス」の必要性の説明がありました。また、加害者からの損害賠償責任の履行促進、刑事手続等における被害者参加の確保等の論点が整理されました。

最後に、事件直前の假谷清志氏の走り書きが紹介され、深刻な予兆があったにもかかわらず、警察に相談しても動いてもらえず、所轄の壁で警察間の連携もない中、事件が起きてしまった悔しい思いが語られました。そして、烏山地域では、町会・自治会、警察、世田谷区が一体となつてうまく回っているの、是非この動きを継続して犯罪を未然防止して欲しいとエールが送られました。

※オウム真理教対策 第51回抗議デモ・学習会は
11月8日(土)です。是非ご参加ください。